

JAL 契約制客室乗務員雇い止め撤回 羽田空港ビラ配布 (8月22日) に参加して

客室乗務員OB

JAL 契約制CAを空に戻す会 <http://www.soranimodosukai.net/> からと「JAL 整理解雇撤回を支援する全客室乗務員の会」からのよびかけで、8月22日の羽田空港での雇い止め撤回のビラ配布に参加しました。

空港は夏休みで家族連れの旅行者、ビジネス旅客で賑わっていました。ビラ配布の参加者は25名、45分間でターミナル到着出口と出発入口で500枚近くのリーフレットをお渡しできました。

ANAでは、来年から客室乗務員は契約制採用を廃止して正社員採用に切り替える発表が行われたばかりで、そのことについての見解も、雇い止め撤回のリーフレットに差し込んで配られました。

帰宅すると時事通信社のニュースでJAL植木社長はインタビューに「正社員化は検討すべき課題の一つだ。色んな可能性を探りたい。現在いる客室乗務員の半数が契約社員で入社し管理職になった人もいる。今のところ契約社員制度は企業価値の最大化に貢献している。」とお答えになっていました。

もし、植木社長が企業価値への貢献をコスト価値を中心に考えていらしゃるのなら、JAL破綻そして再建の過程で6000名が退職に追い込まれ、組合つぶしを狙ったベテランパイロットや客室乗務員165名を整理解雇し、相次ぐ賃金・労働条件の切り下げを受けながらも、歯を食いしばって安全運航を守って来たのは現場の労働者であることをあらためて思い返していただきたいと思います。

懸命に日々のJALの存立基盤である安全運航を維持している現場の労働者を大切にすれば、客室乗務員の正社員採用、整理解雇撤回、雇い止め撤回などの決断をしていただきたいと思います。

目先の利益追及より長期的視点で「利益なくして安全なし」の発想から「安全なくして利益なし」のJALの存立基盤に立ち返る、大きな節目を生かす決断をされることを願います。

(見解文から)

#### 「全日空、客室乗務員の正社員採用」を受けて (見解)

2013年8月22日

JAL 契約制CAを空にもどす会

全日本空輸(ANA)は19日、2014年から客室乗務員を全員正社員採用すると発表しました。客室乗務員の待遇を改善することで離職を防ぐとともに、優秀な人材を安定的に確保することが理由と発表しています。更に「今後の競争に打ち勝つうえで、人材確保と育成は重要な経営課題であり、より長く安定的な女性の力を活用したい」ともコメントしています。

私たち「JAL 契約制CAを空にもどす会」はこの全日空の“正社員採用方針”を歓迎すると同時に、日本航空も早急に客室乗務員を正社員で採用する経営方針に転換することを強く求めるものです。

日本航空をはじめとする日本の航空会社は、1994年から客室乗務員の採用をそれまでの正社員採用から契約制度に切り替えました。この契約制度導入は人件費削減が目的であった事は、「JAL 契約制客室乗務員雇い止め裁判」で明らかになっています。

特に日本航空では、制度導入以降、不安定な雇用形態の中で、パワハラ、退職強要も起こっており、実際、正社員であれば問題にならない「ミス」を理由に、雇い止めに強行された契約制客室乗務員が現在、裁判で係争中です。

この契約制度は一時的・臨時的な制度ではなく、3年経ったらよほどの事がない限り無条件で正社員に切り替える制度です。それは日本航空がこの契約制度を導入しようとした時、国会で問題になり、当時の国土交通大臣が“労働条件が大きく異なればチームワークにも影響する”とし、安全上の理由で行政指導した結果の契約制度なのです。日本航空では採用基準・訓練内容・業務内容・勤務内容など全て正社員と同様です。機内業務は運航規程で定められた編成数に正社員と共に組み込まれ客室乗務員としての保安業務・サービス業務を行っています。航空法で規定されている重要な保安任務の資格要件及び業務要件は正社員、契約制の区別は全くありません。

キャビンクルーユニオンは契約制導入当時から、保安要員としての経験を蓄積・伝承するためにも正社員採用に戻すことを要求してきました。

又、不安定な雇用は物を言えない職場を作り、チームワーク、信頼関係にも影響を及ぼすとし、安全の観点

から正社員採用を強く求めてきました。

全日空に引き続き、日本航空も正社員採用に戻し、現在、フライトしている契約制客室乗務員を3年経ずして早急に正社員に切り替える事を求めます。そして契約制の2年目で雇い止めを強行された現在裁判中の原告を職場に戻すことを強く要求します。

私たちは日本航空の客室乗務員全体の労働条件改善に向け、力を注ぐとともに、保安任務を果たすうえでこれ以上の労働条件低下は絶対認められない事、その意味で全日空の正社員採用後の労働条件がどうなるのか、注目していきたいと考えています。